



“届けよう、服のチカラ”アワード2025 受賞校



【最優秀賞】

2025年は2校が最優秀
賞に選ばれました ✨

長岡市立宮内小学校（新潟県）
東京都立小平南高等学校（東京都）

【UNHCR特別賞】

新潟県立村上桜ヶ丘高等学校（新潟県）

【優秀賞】

私立就実小学校（岡山県）
私立洛南高等学校附属中学校（京都府）
和歌山県立和歌山盲学校（和歌山県）

次ページから
受賞校の実践内容を
ご紹介します。

受賞された学校のみなさま、おめでとうございます！

【最優秀賞】 長岡市立宮内小学校（新潟県）

宮内から世界へ！ 幸せ届けよう！！～わたしたちに できること～

児童による発表（小学5年生）

【活動にいたるまで…】

①2023年3年生「手をつなごう 大作戦！～わたしたちにできること～」

…はじまりは、たった一人のつぶやきだった…

3年生の1月。能登半島地震が起きた。テレビから流れる被害の大きさに驚いた。わたしは思わず「わたしたちにできることはないかな…」とつぶやいた。

②2024年4年生「カンボジア 文具回収プロジェクト」

社会の学習では、3RやSDGsという持続可能な社会をつくるための考えを学んだ。わたしは、SDGsに興味をもち、詳しく調べ、みんなに「子どものわたしたちにも、できることはある。」という提案をした。

活動を探していると、新潟県立大学のサークルの人たちが、カンボジアに文具を送る活動に取り組んでいることを知った。そこで、全校に呼びかけて文具を回収し、カンボジアに送ることになった。

集まった1636本の文具は、サークルのみなさんが直接カンボジアの小学校に届けてくれた。

③そして2025年【“届けよう、服のチカラ”プロジェクト】に取り組んだ

「子どものわたしたちにも、できることはある。」これまでとは別の方法で世界の誰かを支える活動をしたい。と考え、本プロジェクトに取り組んだ。

出張授業を受け、活動のスタートに、「宮内から世界へ！ 幸せ届けよう！！」というスローガンを掲げた。

私たちのチカラでたくさんの世界のともだちを笑顔にする活動をスタートさせた。

【実践活動】

作戦①学校での回収活動：全校児童へおたよりの配布・全校集会や放送、ポスターでお知らせをおこなった。

作戦②地域での回収活動

(1) 中学校区内の学校にお願いしよう：近隣の5校にお願いに行った。どの学校も、「喜んで協力させてください！」と、チカラを貸してくれた。

(2) 地域のお店にポスター掲示のお願いをしよう：地域60軒のお店にポスター掲示のお願いをした。緊張したが、私たちの気持ちをしっかり伝えることができ、「いい活動だね。がんばってね！」と温かい言葉をいただき、さらにやる気が高まった。

(3) 地域のお店に回収箱を置かせてもらおう

(4) 地域のお店で街頭回収活動をさせてもらおう：お店の前で4日間活動をおこなった。買い物に来る方々に自分たちがつくったチラシを直接渡して、わたしたちの思いを伝えることができた。

作戦③自分たちができることがまだある！

(1) お米を販売した収益金を輸送費として寄付したい！：学校田で育てたコシヒカリを販売し、その収益金を子ども服の輸送費としてUNHCRに寄付することにした。また、難民の方々の厳しい生活を知り、支援物資も届けたいと考え、ユニセフの支援ギフトでワクチンセットや栄養治療食、浄水剤を送った。

(2) 服が送られる予定の国のことをもっと知りたい！5,707枚の子ども服を集めることができたが、送られる国についてよく知らないことに気付いた。そこで、元JICA海外協力隊としてシリアに派遣された方からお話を聞いた。シリアは、以前は日本よりも平和な国だったものの、内戦によって町が破壊され、今では世界最大規模の難民を生み出す国になっていることを知った。動画で内戦の様子も見ていただき、大きな衝撃を受けた。さらに、シリアの人々が「世界は現状を知っているのか。どうして助けてくれないのか」と感じていることを知り、私たちにできることは何かを改めて考えるきっかけとなった。

【一年間の活動を通して、わたしたちが学んだこと】

“子どものわたしたちにもできることはある”ということだ。一人ひとりのチカラは小さくても、みんなのチカラを集めれば大きなチカラになり、周りの人たちを笑顔に、幸せにすることができる。

思いを伝えれば応えてくださる地域の方々がいることを知り、私たちは宮内の地域の方々に支えられているのだと感じた。

多くの支えのおかげで目標を達成することができ、感謝の気持ちでいっぱいである。この活動を通して、ふるさと宮内がさらに大好きになった。



一年間の活動を通して、わたしたちが学んだこと



【最優秀賞】 長岡市立宮内小学校（新潟県）

活動詳細

①地域の強みを活かしながら活動に取り組むことができているか

4年生の文房具を回収し、カンボジアに届けた活動をふまえ、5年生になった子どもたちは「今年も自分たちでできることで誰かを笑顔にしたい」という思いをもち、「届けよう、服のチカラ」プロジェクトをスタートさせた。今年には校内中心ではなく、地域にも協力を呼びかけ、多くの服を集めて、「難民の人たちを笑顔にしたい」という願いをもつようになった。中学校区連携の取組を生かし、近隣の5校に回収箱を設置して協力を依頼した。また、ポスターやチラシ、宣伝動画を作成して各校に呼びかけた。さらに、児童が直接協力をお願いし、地域のお店に回収箱を設置していただいた。地域のリサイクル活動の取組を生かして街頭回収も実施し、思いを直接伝えながら協力を呼びかけた。その結果、5,707枚の子ども服を回収することができ、達成感を味わうとともに、学区内約60店舗にポスター掲示をお願いする中で、多くの励ましの言葉をいただき、活動への意欲をさらに高めることができた。

②難民問題や服のチカラについての情報収集を行っているか

UNHCRの資料を活用して難民問題について調べ学習を行い、自主学習ノートのコピーを掲示することで、子どもたちの関心を高めた。回収した服はシリア・チャド・モリタニアなどに難民キャンプに送られる予定であることを知り、それぞれの国の現状についても調べた。さらに理解を深めるため、長岡市国際交流課の「世界が先生」事業を活用し、元JICA海外協力隊シリア派遣隊員による特別授業を実施した。

③集めた情報を適切に活動に結び付けているかどうか

出前授業や調べ学習で学んだ難民問題について、回収活動のポスターやチラシに掲載し、校内や地域へ広く発信をした。近隣スーパーでの街頭回収では、地域住民に直接思いを伝え、難民問題への理解と協力を呼びかけることができた。また、本校では毎年学校田で収穫した米を販売しており、収益金の使い道を子どもたちに考えさせたところ、「子ども服を難民キャンプへ送る運送費に使いたい」という意見が出た。そこで、収益金をUNHCRやユニセフに寄付することとした。また、世界の子どものために役立ててもらいたいという願いを、米販売のポスターやチラシにも掲載して広く協力を呼びかけた。

④活動の「計画設計」と「修正・改善」が適宜行われているか

年間を通して、子どもたちの「思い」が次の活動へとつながるよう、「ひと・もの・こと」との出会いを大切にしながら、計画的に活動を進めた。

【5月】前年度の「カンボジア文具回収プロジェクト」報告会を実施し、現地に文具を届けた大学生から、贈呈式の様子やカンボジアの地雷問題について話を聞いた。

【6月】「届けよう、服のチカラ」プロジェクトへの参加を提案し、活動計画を立案。

【7月】出張授業を実施し、校内回収活動の計画と告知をおこなった。

【9月】校内回収活動で1,700枚の子ども服を回収した。あわせて地域回収活動の準備を進め、回収箱やポスター掲示場所の選定、依頼活動、ポスター・チラシ・宣伝動画の制作をおこなった。

【10月】地域回収活動を実施し、回収した服の梱包を開始。

○学年：小学校5年生 85名

○活動の枠組み：教科（具体的に：総合的な学習の時間・国語・図工・社会）・児童会・その他

【11月】近隣スーパーで街頭回収活動をおこなった。また、「世界が先生」事業として元JICA海外協力隊隊員の講話を通してシリアの現状を学んだ。さらに、収穫した米を販売し、収益金はUNHCRやユニセフへ寄付した。最終的に、5,707枚（段ボール57箱分）の子ども服を発送した。

⑤通常の教科学習との関連づけて学びを深められているかどうか

【国語科】

告知ポスターやチラシ作成に向けて、読み手に思いが効果的に伝わる文章構成を学習した。校内放送や店内放送、宣伝動画、PR活動の原稿づくりと発表練習を重ね、相手意識をもった表現力を高めた。

【社会科】

難民キャンプやUNHCR、SDGs、ユニクロの取り組み、シリアの状況などを調べ、学んだ内容をポスターやチラシに生かした。「未来を支える食料生産」の学習として米作りに取り組み、販売収益をUNHCRへ寄付した。

【図画工作科】

校内外あわせて約100枚のポスターや15箱の回収箱を制作。さらに、告知活動で配布する折り紙の服も作成。

【総合的な学習の時間】

校内や中学校区内での告知活動、回収活動の計画・準備・実施をおこなった。元JICA海外協力隊シリア派遣隊員を講師に招き、特別講義を実施し、難民キャンプやシリアの現状への理解を深めた。

児童の感想

◎これまで集めた服たちが一斉に運ばれるのを見て、服を集める活動が終わるんだなあと寂しい気持ちになった。

◎この活動を通して、以前よりも自分から進んで行動できるようになった。

◎「協力って大事なんだな」と実感し、仲間をフォローできるようになった。

◎全ての活動が終わり、一言で表すと本当に楽しかった。将来、難民の方々やたくさんの人を助ける仕事につきたいと思う。



積み込み終了後、「出発式」を行い、これまでの活動への思いと「お願いします。」の気持ちをドライバーに伝え、トラックを見送った。「出発式」の様子は、地元ケーブルテレビ局の番組や新聞に取り上げられ、広く活動を周知することができた。

【最優秀賞】 東京都立小平南高等学校 （東京都）

生徒283名の挑戦 13,588着の想いを繋ぐ

生徒による発表（高校1年生）

【はじめに】
東京都立小平南高等学校は、東京都のほぼ中央に位置し、緑豊かな環境の中で文武両道を目指す高校である。
1年生283名全員で「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に挑戦した。

【学びから生まれた行動】
地理総合では、難民の現状／UNHCRの役割／学校に通えない子どもたちの現実を学び、「安心して眠る場所がない」その事実は、私たちに大きな衝撃を与えた。
英語コミュニケーション I では、当時7歳だった少女がシリアの紛争下から平和について訴え続け、昨年国際子ども平和賞を受賞したことを学び、同世代の行動に勇気をもらい、「私たちにもできることがある」と考えた。

【活動の軌跡】
①活動のスタート
出張授業を終え、プロジェクトの本格始動。服の回収がどのように難民支援につながるのかを知り、活動の意義を深く理解することができた。
9月からは、回収場所の選定と協力依頼をおこなった。高校だけでは子ども服が集まりにくいと考え、近隣の保育園・幼稚園・小中学校にも協力をお願いした。すべてが順調だったわけではなく、協力を断られたこともあったが、粘り強く依頼を続け、11の施設に協力してもらえた。
②回収活動での工夫
11月から、回収活動が本格的始動。
・分かりやすいポスターの作成／・子どもが思わず入れたくなる回収ボックスのデザイン／・保護者向け通知文やチラシの作成
さらに、難民問題を理解してもらうために、保育園や小学校で寸劇やミニ授業、クイズも取り入れた発表をおこなった。実際に現地へ足を運び、自分たちの言葉で伝えることで、支援の輪が広がっていった。

③仕分けと梱包
11月中旬から仕分けと梱包がはじまった。当初は1,580着を目標としていたが、目標の8倍を超える、13,588着もの服が集まった。
67箱の段ボールが並んだ光景を目にしたとき、これまでの努力と地域の皆様の温かい協力の大きさを実感し、胸がいっぱいになった。
12月には、協力してくださった施設へ感謝状と回収枚数の報告に伺った。地域の方からは、「子どもが大切にしていた服が、誰かの心を温めるならうれしい」という言葉をいただき、私たちの活動の意味を改めて実感させてくれた。

【生まれた変化 私たちの成長】
このプロジェクトを通して、私たちは多くのことを学んだ。
まずは、授業で学んだ社会問題を自分ごととして捉え、行動に移すことの大切さである。次に、「やればできる」という自信と希望。
一人の力は小さくても、283人が力を合わせれば大きな力になることを実感した。
また、それぞれの得意分野を活かしながら協力することで、チームワークも大きく向上した。
難民キャンプでの就労支援や環境負担軽減にも取り組んでいることを知り、支援の形は一つではないことも学ぶことができた。
私たちは、ここをゴールにするのではなく、これからも難民問題について考え続け、地域とのつながりを大切にしながら、新しい支援活動に挑戦していきたい。
届けられる13,588着の服は、世界のどこかで新しいチカラになることを願っている・・・



生徒の感想

高校生にとって難民問題は身近とは言えないが、現状や支援の必要性を調べる中で、少しでも力になりたいという思いが強まった。当初は一部のリーダーが中心だったが、次第に学年全体が主体的に動くようになった。今回の活動を通して、団結力が高まるとともに、社会問題をより身近に感じられるようになった。このプロジェクトへの参加は、「まず知ること、そしてやってみること」の大切さを学んだ、貴重な経験となった。

【最優秀賞】 東京都立小平南高等学校 （東京都）

活動詳細

①地域の強みを活かしながら活動に取り組むことができているか

今回のプロジェクトでは、小平市の4施設と、本校に隣接する国分寺市の6施設をはじめ、多くの地域施設にご協力いただいた。近隣の保育園・幼稚園から小学校・中学校、高校まで幅広く関わっていただくことができた。その結果、ベビー服とキッズ服の偏りなく回収することができ、当初の目標枚数を大きく上回る成果をあげることができた。地域密着型の高校という強みを生かし、地域とつながりながら学年全体でプロジェクトに取り組むことができた。

②難民問題や服のチカラについての情報収集を行えているか

「総合的な探究の時間」を通して、難民問題について主体的に情報収集をおこなった。GUの出前授業をきっかけに、世界の難民の現状や難民の子どもたちの生活、UNHCRの支援活動、服の持つ力、古着回収がどのような支援につながるのかについて調べ学習を進めた。さらに、「地理総合」ではシリアの難民問題を学び、「英語コミュニケーションⅠ」ではシリアの惨状を世界に発信した バナ・アルアベド さんについて学習した。講演や授業を通して、紛争や迫害、自然災害などにより1億2,260万人もの人々が故郷を追われている現状を知り、その数が日本の総人口に匹敵することから、問題の深刻さを実感した。また、服には体や命を守るだけでなく、気持ちや人とのつながりを支える力があることにも気付かされた。実際に服を受け取った難民の子どもたちの映像を見たことで、より現実の問題として捉え、**高校生の自分たちに何ができるのか**を考えるようになった。

③集めた情報を適切に活動に結び付けているかどうか

各クラスで「訪問担当」「発表用ポスター作成担当」「告知用ポスター作成担当」「回収箱担当」「回収・保管担当」「仕分け・梱包担当」に分かれて活動をおこなった。集めた情報の中から重要だと思うことや伝えたい内容を整理し、それぞれの活動に反映させた。発表用ポスターやプレゼンには、難民やUNHCRの説明、古着の寄付がどのような支援につながるのかを必ず盛り込んだ。また、服の持つチカラにあらためて着目し、防寒やけが防止といった機能だけでなく、おしゃれをすることで紛争での嫌な体験を和らげ明るい気持ちや前向きになれる作用があり、日常を鮮やかにするというチカラがある。ということを伝えた。ポスターやプレゼンは、簡潔で分かりやすい表現にしたり、ふりがなやイラストを加えたりするなど、**誰にでも伝わる工夫**をおこなった。保育園では「いのち」「きもち」「つながり」という合言葉を使った劇で分かりやすく伝え、小学校ではパワーポイントやクイズを用いて一緒に考える授業形式で交流を実施。情報収集で得た学びを生かし、相手に合わせた伝え方を工夫しながら協力を呼びかける活動へとつながることができた。

④活動の「計画設計」と「修正・改善」が適宜行われているか

【7月】出張授業を受け、各クラスで目標や回収枚数を決定。

○学年：高校1年生 283名
○活動の枠組み：教科総合的な探究の時間

【9月】

役割分担を行い、それぞれの担当ごとに準備を進めた。

【10月】

各施設へ協力を依頼し、回収期間や回収箱の設置場所を決定して、実際に服の回収。

【11月】

回収した服の保管・仕分け・箱詰め・配送を行い、協力先への報告とお礼、各クラスでの振り返りプレゼンを実施。活動の中では、当初予定していた施設の協力を得られない場面もあったが、クラス間で連携し、依頼にいたっていない施設を確認して新たに依頼することができた。保育園・幼稚園向けに作成したポスターについて、実際に持参するのは保護者であるとの指摘を受け、保護者向けに内容を修正。想定以上に多くの服が集まり、計画通りに梱包が進まない状況もあったが、クラス全体で協力し、それぞれの得意分野を生かして役割を再分担し、流れ作業で効率よく進めることで、期日までに作業を完了させることができた。

⑤通常の教科学習との関連づけて学びを深められているかどうか

「地理総合」では中東地域の学習を通して、シリアの難民問題やUNHCRについて学習した。紛争の経緯や影響、多くの人々が国内外で避難生活を続けている現状、そして難民を支える国際的な取り組みについて理解を深めた。「英語コミュニケーションⅠ」では、シリアの惨状を世界に発信したバナ・アルアベドさんについての英文を読んだ。爆撃や物資不足の中で恐怖と向き合いながらも、平和を訴え続けた姿を知り、同世代の行動力に強い衝撃を受けた。さらに、彼女が「The International Children's Peace Prize 2025」を受賞したというニュースも読み、**平和について改めて考える機会**となった。このように教科を横断して学ぶことで、紛争や難民問題を知識として理解するだけでなく、当事者の声を通してその現実を身近に感じることができた。そして、「難民の子どもに服を届ける」というプロジェクトが、高校生である自分たちにできる具体的な支援の一つであると実感した。**世界で起きている出来事を自分事として捉え、自ら考え行動する力を育む機会**となった。



左上：小学校への訪問授業の様子。ゲーム風のパワポを作り児童の興味を引いた。授業の最後にはKahoot!で難民クイズを行い、大変盛り上がった。
左下：小学校への訪問授業の様子。授業の後児童は高校生との交流を楽しみ、時間いっぱい一緒に過ごした。将来、本校に入学したい！と言ってくれる児童が何人もいて、うれしかった。
右上：回収後、感謝状を届けに行ったときの様子。今年と同じ2,025枚という数字に大喜びだった。
右下：送った感謝状。保護者にも見ていただけるように、拡大したものを校内に掲示していただいた。

【UNHCR特別賞】 新潟県立村上桜ヶ丘高等学校（新潟県）

つながる思い、あふれる笑顔で未来を変える、小さな一歩は子どもから
～服で笑顔届けよう～

生徒による発表（高校3年生）

【取り組み】
①STEP1：知る（世界の子どもを知る。難民を知る）
ケニアに派遣されていた講師から、女子少年院で教育や大人の関わり方で子どもが変わる様子を聞き、他者からの支援が子どもを笑顔にし未来への夢や希望を持つ一歩になることを学んだ。また、子どもの権利条約の再確認と世界の子どもたちの困難な状況を理解するための学習にも取り組んだ。映像授業で学んだ難民について再確認し、難民の人々に必要な支援を考えた。今の自分たちにできることは限られているかも知れないけれど、
少しでも多くの子どもたちの幸せに役立ちたいという思いが強まった。

②STEP2：伝える（地域で伝える。SNSで伝える）
・子どもを中心にプロジェクトに親しみをもち、興味を持ってもらいたいという思いで、オリジナルキャラクターを考え、ポスターやチラシなどPRの多くの場面で活用。
・高校生の私たちが少し前まで着ていた服などのキッズサイズの服の回収をお願いするため、全校集会で協力を呼びかけ。
・近隣の保育園だけでなく、小中学校や特別支援学校を訪問し、先生方に活動を紹介しポスターの掲示とチラシの配布をお願いした。
・地域のイベントにボランティアとして参加。遊びブースで子どもたちと触れあいながら、活動を紹介し、会場を回り親子連れに声をかけ活動について説明。
・日頃から交流のある保育園で活動を紹介する劇をし、生きるために大切なもの、服の役割や服が届く流れなどを、オリジナルのキャラクターで演じた。
・ペープサートや紙芝居で幼児に分かりやすく工夫した。
・世界中の子どもたちの「しあわせ」を願ってみんなで「ちきゅうのこども」のダンスをした。
・10月から本格的に回収を始めたが、10月末での回収枚数が少なかった。そこで、PRのために、地元新聞での活動紹介と動画を制作し、本校のSNSで発信したところ、地域の方からの問い合わせなど反響があり、回収期間後半は多くの服が集まった。

③STEP3：行動する（集める、分ける。送る、贈る）
課題として、例年同様集まった対象外の衣服の活用方法を検討し、対象外の衣服と授業の余り布を組み合わせでファブリックリースを制作した。
世界の平和と子どもたちの幸せを願い、UNHCRのシンボルカラーの青色のリースは、回収に協力していただいた園や学校にメッセージカードを添えて贈った。

【成果】
・多くの方々の協力が「服が集まる」という目に見える形となって表れ、感謝の気持ちと大きなやりがいを実感することができた。
・これまで各教科で学習してきた内容を結びつけ、社会や世界と関連付けながら実践へとつなげることができ、高校生活の集大成となる取り組みとなった。
・みんなで意見を出し合い、互いに助け合いながら活動したからこそ、大変さの中にも達成感を味わうことができた。
仲間と協働することの大切さを改めて学ぶ機会となった。

【最後に】
私たちや先輩方の思いを入れたこの活動の小さな一歩が、難民をはじめとする世界の子どもたちの笑顔につながり、未来への夢や希望を支える力になることを心から願っている。



【計画の修正と改善】

PRの強化

10月末時点 回収枚数は600枚
本校と屋内遊び場の回収が少ない

↓

- ・地元新聞での活動紹介
→地域の方からの問い合わせ
- ・PR動画を制作しSNSで発信

↓

期間後半は4,000枚ほどの服を回収

ベビーから10歳までに600着超
世界の子どもたちに服を
村上桜ヶ丘高校生徒がユニクロと連携し回収

11月2日（日）付けサンデーいわふね

SNSで活動を紹介

つながる思い、あふれる笑顔で未来を変える、
小さな一歩は子どもから
～服で笑顔届けよう～

ご協力おねがいします

【UNHCR特別賞】新潟県立村上桜ヶ丘高等学校（新潟県）

活動詳細

【活動のテーマ】 つながる思い、あふれる笑顔で未来を変える、小さな一歩は子どもから～服で笑顔を届けよう～

①地域の強みを活かしながら活動に取り組むことができているか

本校は、これまで築いてきた地域との信頼関係や人的ネットワークを基盤に、本プロジェクトを展開した。市内外から多くの来場者が訪れる地域イベントに学生ボランティアとして参加し、子ども向けブースを担当しながら活動をPRした。保育実習で学んだ子どもとの関わり方を活かし、親子連れに積極的に声をかけ、活動の紹介とチラシの配布で活動をPR。
また、近隣の保育園、幼稚園、小中学校、特別支援学校、公共施設などに協力を依頼し、ポスター掲示や回収ボックスの設置を実施した。特に、卒業（卒園）生が中心となって訪問することで、円滑な連携を図ることができた。

②難民問題や服のチカラについての情報収集を行えているか

難民問題については、JICA国際教育出前講座を実施し、子どもの権利や世界の子どもたちを取り巻く課題について学ぶ機会を設けた。さらに、UNHCRのワークショップを活用し、難民の現状や必要な支援を具体的に考えた。知識の習得にとどまらず、「自分たちに何ができるのか」という視点で学びを深めた。
また、家庭科や服飾関連科目、保育分野の授業と関連付け、衣服の役割や乳幼児に適した衣服の在り方を再確認した。難民問題を「子どもの権利」の観点から捉え直し、教科学習と結び付けて「服のチカラ」を多角的に理解することができた。

③集めた情報を適切に活動に結び付けているかどうか

収集した知識や気づきは、近隣保育園での劇や紙芝居、ペープサートなどの表現活動へと具体化された。生きるために必要なものや衣服の役割は紙芝居で分かりやすく示し、難民の子どもたちに服が届く様子はペープサートを用いて視覚的に表現した。
映像で見た難民の子どもたちの喜びの姿は、身振り手振りを工夫しながら演じ、幼児にも感情が伝わるよう工夫した。また、世界中の子どもたちの幸せを願い、全員でダンスを行うなど、参加型の構成とした。
学習内容を単なる知識で終わらず、「伝える活動」へと転換した実践であり、教科で培った表現技術を社会の中で活用する機会となった。

④活動の「計画設計」と「修正・改善」が適宜行われているか

計画段階では、地域の年少人口を根拠として目標枚数を設定し、サイズの偏りを防ぐため周知対象を小・中学校へ拡大した。また、過去の先輩の制作物を再活用することで、限られた準備期間でも効率的に活動を進められるよう工夫した。
一方で、回収枚数が想定より伸び悩んだ際には、新聞掲載やPR動画制作、SNS発信など新たな広報戦略を導入した。その結果、問い合わせや回収数が増加し、目標達成へとつながることができた。

○学年：高校3年生 11名
○活動の枠組み：家庭（課題研究）

また、梱包作業が追いつかない状況では下級生の協力を得るなど、学年を越えた体制を構築した。
データに基づく目標設定と、状況に応じた柔軟な改善の実施により、活動をより実効性のあるものへと高めることができた。

⑤通常の教科学習との関連づけて学びを深められているかどうか

本活動は、家庭科、保育、福祉科、社会科など複数教科の学習内容を横断的に活用する実践として位置付けた。保育技術検定や実習で学んだ幼児理解や表現技術は、訪問活動や劇の構成に直接活かされた。
また、衣服の役割や子どもの権利についての学習内容を、実際の社会課題と結び付けることで、知識を実践へと転換する経験を積ませた。**教科で学んだ知識・技能を社会の中で活用する「実践的な学び」へと発展させた点**が、本校の大きな成果である。

生徒の感想

◎ 地域イベントでのPR活動では、大人に話しかけることに強い緊張を感じたり、思うような反応が得られず落ち込んだりする場面もあったが、子どもたちと積極的に関わることで、少しずつ活動を広めることができた。勇気を出して行動することの大切さを実感する機会となった。
◎ 当初は難民の存在を身近に感じていなかったが、人に伝える活動を重ねる中で「力になりたい」という思いが強まっていった。回収ボックスいっぱいになった服を見て、地域の方々の優しさを実感し、自分たちの行動が誰かの支えになっているという達成感を味わった。また、当たり前服を選び、おしゃれを楽しめる自分たちの生活が決して当然ではないことにも気づいた。戦争によって日常を奪われている子どもたちの現状を知り、日々の生活への感謝の気持ちが芽生えた。同じ目標に向かって協力し合う中で、困難さの中にも楽しさや充実感を感じ、仲間とともにやり遂げる経験が大きな成長につながった。

Instagramで活動を紹介。
オリジナルキャラクター「さくらレンジャー」が動画でPR（再生回数2,500回以上）。103件のいいねがあった。「さくらん」と「よつばちゃん」も一緒に登場。



保育園での劇では、服の役割や難民に服が届く様子を紹介した。オリジナルキャラクター「さくらレンジャー」が回収ボックスの服を難民の子どもに届ける物語で構成し、園児が塗った絵や先輩制作の地球デザインも活用した。子どもたちは集中して見入り、「みんなもヒーローだよ」と伝えた。



【優秀賞】 学校法人就実学園 就実小学校（岡山県）

就実から世界に届け！“届けよう服のチカラ”プロジェクト

生徒による発表（小学3年生・6年生）

【はじめに】

就実学園就実小学校は、岡山県岡山市にあり、「グローバル・シティズンシップを備えたクリエイティブな就実の子」の育成を学校教育目標とし、iPadを活用しながら学習に取り組んでいる。

縦割り探究学習の“QUEST Time”の時間には、1～6年生の合計18人が学年を超えて助け合うチーム力を育成しながら、異学年ならではの多様なアイデアを生かして探究学習に取り組んでいる。

A3チームのスローガンは、「なかよく・楽しく・協力しあい、ゆめに向かってがんばろう！」である。

【知る…難民問題・服のチカラプロジェクトについて】

世界中には約1億2,320万人が難民として生活をしているという現実を知り、「私たちに何ができるだろう」と考えた。このプロジェクトを知り、「自分たちにもできることがあるんだ！行動にうつそう！」と思った。

【広げる・第一歩…学校内での呼びかけと回収箱作り】

まずは学校内での呼びかけから始めた。

- ・ポスター作成…どんな内容を書けば伝わるかな？
- ・回収箱づくり…折り紙やイラストで目立たせ、服の決まりも分かりやすく書いた。
- ・全校放送でのお知らせ…学校内みんなに知ってほしい。翌日からたくさんの服が集まり、とても嬉しかった。

【さらに広げる…学校を飛び出し、地域全体へ】

「もっと広げたい」と思い、学校の外へも活動を広げた。まずは学校の近くにある幼稚園や大学に協力をお願いしに行った。

さらに、地域の公共施設やこども園、図書館、市の施設などにも訪問。

回収箱を持って直接お願いに行き、チラシも配った。とても緊張したが、自分たちの思いをしっかりと伝えることができた。

【集める・仕分ける…想像を超えた服の量！】

服を回収し、集める仕分ける段階となり、想像をはるかに超えた服の量に私たちはとても驚いた。

合計20箱を発送することができた。畳んでも畳んでも終わらない作業では、保護者サポーターの方々にも協力していただいた。

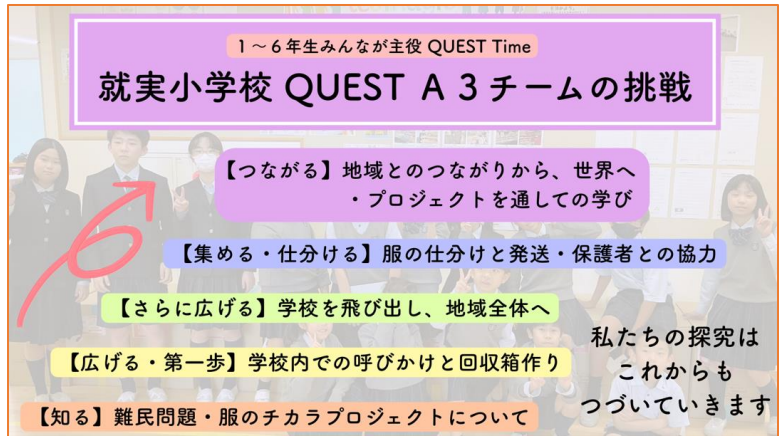
回収箱の中に服とともに手紙を入れてくださった方がいた。『孫たちの服です。目覚めることができ、服も喜んでいでしょう。平和な世の中になりますように。』

このような温かいお手紙をいただき、地域の方とつながることで、服を受け取る側だけでなく、服を渡す側も笑顔になれることを知ることができた。

【つながる…プロジェクトを通じて学んだこと】

このプロジェクトを通じて、「世界には困っている人がたくさんいること」「私たちにもできることがあること」「学年を超えて協力する大切さ」「地域の人たちの温かさ」を学び、今の当たり前がとても幸せなことだということも気づいた。

私たちの探究はこれで終わりではない。これからも私たちにできることを考え、行動していきたいと思う。



【優秀賞】 学校法人就実学園 就実小学校（岡山県）

活動詳細

①地域の強みを活かしながら活動に取り組むことができているか

地域の公共施設に協力を依頼し、ポスター掲示や回収箱の設置、チラシ配布を行うなど、地域とのつながりの中で活動を進めた。ある施設では、チラシを拡大して掲示していただいたことで多くの服が集まった。また、店舗の協力により周辺の他店舗にも活動が広がり、より多くの方に周知することができた。こども園でも箱に入りきらないほどの服が集まり、数回に分けて回収をおこなった。回収時には保護者にも協力をお願いし、各施設を訪問した。このように、施設職員や地域住民の支えによって活動は地域全体へと広がった。子どもたちは、自分たちの行動が地域の人々の心を動かしていることを実感することができた。地域との協働は、教室の中だけでは得られない「生きた学び」となり、子どもたちの誇りと自信を育む貴重な経験となった。

②難民問題や服のチカラについての情報収集を行えているか

1学期には、映像授業を通して「難民」について学び、「どのようなことに困っているのか」「自分たちにどのような支援ができるのか」を考えた。UNHCRから届いた資料も活用し、世界の現状への理解を深めた。2学期には、国際協力に携わる方による出前授業を受け、バングラデシュでの活動の写真や動画を通して、現地の生活や課題について学んだ。児童は「日本にも難民はいるのか」「英語の学びは役に立つのか」など、自分たちの生活と結びつけた質問を行い、主体的に理解を深めた。また、自分たちがおこなっている服の回収活動についても質問し、「服は逃れてきた人々にとって大切な支援になる」という話を聞いたことで、活動への確信を持つことができた。難民問題は低学年にとって抽象的で難しいテーマだが、映像や写真、講師の言葉、そして上級生との対話を通して、「世界と自分の生活がつながっている」という気づきを体験的に学ぶことができた。

③集めた情報を適切に活動に結び付けているかどうか

学んだ情報をもとに、「伝える」「知ってもらう」ことを目的として、校内外でPR活動をおこなった。校内では、1・5・6年生が協力してスライドを作成し、全校放送で難民問題と「届けよう服のチカラ」プロジェクトについて紹介。同日には保護者向けにメールを配信し、児童玄関にはポスターを掲示した。放送の翌日には早速服の寄付が届き、児童は「自分たちの声が届いた」という手応えを感じることもできた。また、地域施設を訪問した際には、児童自身が活動の目的を説明し、相手に伝わるよう工夫した。この経験を通して、児童は学んだ知識を行動に移す力や、相手の立場を考えた発信力・説明力を身につけることができた。

④活動の「計画設計」と「修正・改善」が適宜行われているか

活動準備の段階では、ポスター制作や回収箱づくりに時間がかかるなどの課題があった。しかし、児童同士で話し合い、できることから取り組む形で計画を柔軟に見直した。異学年で協力しながら一つずつ課題を乗り越え、チームとしての達成感を味わうことができた。校外学習当日には5つの施設を訪問し、活動内容の説明やポスター掲示、チラシ配布をおこなった。

○学年：小学1～6年生 18名

○活動の枠組み：教科（縦割り探究学習の時間）

さらに、隣接する大学の学園祭で探究学習を紹介する機会を得た際には、児童の発案で参加を決定し、回収箱とちらしを設置。学生に直接声をかけて活動を紹介する中で、初めは緊張していた低学年児童も、上級生の姿に勇気づけられ、自ら話しかけられるようになった。また、服の集計や梱包作業では、限られた時間の中で効率よく進めるために、他チームや保護者へ協力を呼びかけるなど、主体的に改善を重ねた。これらの経験を通して、「計画→実行→振り返り→改善」という探究的なサイクルが自然と身についた。

⑤通常の教科学習との関連づけて学びを深められているかどうか

本校では、総合的な学習の時間の一部を縦割り探究学習「QUEST Time（クエストタイム）」として位置づけ、1～6年生18名が協働して活動した。本プロジェクトは、教室での学びを社会と結びつけ、「学びを実際に生かす」ことを目的として取り組んだ。教科横断的な学習の中で、国語科ではポスターやちらし、放送原稿づくりを通して「伝える力」を育み、社会科や生活科では「地域社会に役立つ力」を養った。道徳科では「助け合い」や「思いやり」について考え、行動へとつなげた。児童は地域施設への依頼や説明を通して、知らない大人に自分の考えを伝える経験を重ね、社会に向けて行動する勇氣と自信を得ることができた。また、低学年が上級生の姿から学び、上級生が下級生を導く中で、学年を越えた協働とリーダーシップの育成も見られた。このように、「届けよう服のチカラ」プロジェクトは教科で学んだ知識や技能を社会に応用する実践的な学びの場となった。子どもたちは、自分たちの小さな行動が大きな力になることを体験し、発送作業を終えた今、達成感とともに次の学びへの意欲を高めている。

生徒の感想

- 地域の人たちが私たちの活動を応援してくれてうれしかった。
- 校内放送をした翌日に服が届いてびっくり！
- 今の私たちの当たり前の日常はすごく幸せなことだと気付いた。
- ありがとう！「届けよう服のチカラ」プロジェクト！

「孫達の服です。
目ざめることができ、
服も喜んでいるでしょう。
平和な世の中になりますように。
70才のパパババより」

地域の方とつながることで、服を受取る側だけではなく、渡す側も笑顔になれることに気づいた

こんなに集められるなんてびっくり！



【優秀賞】洛南高等学校附属中学校（京都府）

世界を知り今の自分にできること

生徒による発表（中学3年生）

【活動の三本柱】

- ①know・・・知る
- ②act・・・行動する
- ③connect・・・つながる

①know・・・出張授業を通して難民問題や服を回収する意義について学んだ。普段当たり前に着ている服が、寒さやけがから人を守り、人を笑顔にし、平和につながるチカラを持っていることを知った。

出張授業後には、「服をもっと大切にしたい」「難民について初めて知り驚いた」という声が上がった。

さらに、夏休みには難民についての調べ学習に取り組んだ。世界には多くの難民が存在し、その約40%が18歳未満であることを知り、問題をより身近に感じた。学習成果はレポートやポスターにまとめ、文化祭で展示・発表した。多くの来場者に共感していただいた。

②act・・・私たちは、ただ服が集まるのを待つのではなく、協力してくれる人の顔が見える活動にしたいと考えた。

洛南学園の強みである小中高一貫の縦のつながりを活かすべく、全66クラスに直接出向き、このプロジェクトへの思いを語った。

さらに、これまで交流のなかった保育園や幼稚園にも協力を呼びかけた。小さな子どもたちに趣旨を伝えるため、各班で工夫を重ねた。

・服が地域から世界へ広がっていく様子を表現したポスター

・子どもたちが思わず開けたくなる仕掛け付き回収ボックス

・紙芝居やパペットを使ったわかりやすい説明

など、それぞれの立場に合わせた伝え方を工夫した。

③connect・・・最後に、「つながる」活動を行った。協力してくださった園児や小学生へお礼訪問を行い、再び触れ合う時間を持った。

この経験が、いつかどこかで思い出してもらえることを願っている。また、先生を通じて難民出身の方のお話を聞いたり、

海外の小学生とオンライン交流を行ったりすることもできた。このプロジェクトが、新たな国際的なつながりを生み出した。

【expand・・・“自分から世界へ”意識の広がり】

私たちは「知る・行動する・つながる」という三本柱を実践してきた。この柱に基づき、具体的に世界の課題を知り、周りに協力を呼びかけ、想いを伝えるというアクションを積み重ねたことで、はじめは自分たちだけの問題意識を、仲間へ、そして地域へ、さらに世界へと広げていくことができた。最初は与えられた課題のように感じていた仲間も、今ではこの問題を自分事として捉えている。

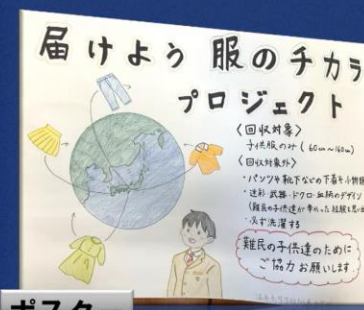
この活動はゴールではなく、新たなスタート。

世界中の子どもたちが笑顔で暮らせる未来を目指し、自分にできることを問い続け、挑戦し続けていきたいと思う。

02.活動の三本柱



04.『 act 』 “チカラ”の結集



ポスター



回収ボックス

05.『 connect 』



難民キャンプ
現地report



ルワンダ
小学生
オンライン交流

【優秀賞】洛南高等学校附属中学校（京都府）

活動詳細

①地域の強みを活かしながら活動に取り組むことができているか

本プロジェクトへの初参加であり、他府県から通学する生徒も多い本校の実情を踏まえ、まずは学園全体と、日頃からつながりのある中学校・高等学校・幼稚園、さらに近隣の保育園へと活動を広げることにした。本校は小中高一貫教育だが、このような活動への参加はすべての学年にとって初めての経験であった。そこで今年度は中学3年生を発信者とし、学園全体へ活動を周知し、**学園が一体となって取り組むこと**を目標とした。そして今回の課題として、地域との連携をさらに広げていくことを見据えた。また、学校のすぐ近くにある保育園とはこれまで十分な交流の機会がなかったことや、部活動を通してつながりのある幼稚園との関係をさらに深めたいという思いから、園児との交流も目的の一つとして協力をお願いした。今後は、学園全体での取組を基盤に、**地域全体へと発信を広げる挑戦**をしていきたいと考えている。

②難民問題や服のチカラについての情報収集を行えているか

「難民」という言葉は知っていても、詳しく理解している生徒は多くはなかった。今回の取り組みを通して難民の現状を知ったことで、生徒たちは世界情勢や国際課題に関心を持つようになった。UNHCRの活動について積極的に調べ、出張授業を受ける中で、難民問題は自分たちと年代の若者にも起きている現実であると知り、**「自分事」として考えられるようになった**。また、普段何気なく着ている服に大きな「チカラ」があることを知り、企業が行うサステナビリティ活動についても学んだ。難民支援だけでなく、環境問題やジェンダー課題など、多角的な視点から「服」が世界平和につながる可能性を知ることができた。身近な服で人を支えることができると気づいた経験は、本校の教育理念の一つである「社会に献身する」姿勢と深く結びつく成果となった。

③集めた情報を適切に活動に結び付けているかどうか

活動内容や思いを載せた案内プリントやポスターを作成し、どのようにすれば伝わるか、興味を持ってもらえるかをグループごとに話し合い、創意工夫を凝らした。紙芝居やパペット、劇、スライドやパワーポイントなどを制作し、各年齢に合わせてわかりやすく伝えることができた。幼児や児童に向けては、動物や宝箱、迷路ゲームの仕掛けを取り入れた回収ボックスを作成し、紙芝居では世界に困っている友達がいることや、「服」を通して同じ年齢の子どもたちを笑顔にしようというメッセージを、わかりやすい物語で伝えた。本活動に参加したことで難民への理解が深まり、「服のチカラ」が新たな発見となった。何不自由なく過ごせている自分たちの生活や身の回りの「モノ」への感謝が生まれると同時に、「**今の自分、将来の自分には何ができるか**」を考えるきっかけとなった。難民の現状を身近な問題として捉えられるようになったことで、物を丁寧に扱うようになったり、衣類を大切に使う姿勢が見られたりするなど、生徒の意識の変化も感じられた。

④活動の「計画設計」と「修正・改善」が適宜行われているか

当初は、衣類回収の告知と回収活動のみを想定していたが、幼稚園を担当した生徒から「子どもと一緒に遊ぶ時間があれば、より深い繋がりが生まれるのではないか」という意見が出された。そこで、衣類回収だけを目的とするのではなく、「**繋がり**」を深める活動へと発展させることにした。

○学年：中学3年生 289名
○活動の枠組み：総合的な学習の時間

本校は小中高一貫校であることから、校内の連携をさらに強めるとともに、近隣の保育園や幼稚園とも継続的な関係を築くことを目指した。園児のために折り紙で作った手裏剣を手渡したり、担当クラスに入り一緒に遊ぶ企画を実施したりするなど、交流の機会を設けた。また、訪問後も衣類の回収状況を確認したり、活動への意見を聞いたりすることで、継続的なつながりを築くことができた。さらに、難民を経験したルワンダ共和国の方とのご縁から講演会を実施し、「届けよう、服のチカラ」プロジェクトの意義をより深く学んだ。加えて、ルワンダ共和国の子どもたちとのオンライン交流会を行い、現地の生活や困りごとについて直接話を聞くことで、**本活動の意義を自分事として実感する機会**となった。本プロジェクトへの参加は、新たな企画を生み出し、より主体的で力強い活動へと発展するきっかけとなった。

⑤通常の教科学習との関連づけて学びを深められているかどうか

夏休み期間中には、社会科の学習内容と結びつけて「難民」についての調べ学習を行い、理解を深めた。調べた内容をレポートにまとめ、「届けよう服のチカラプロジェクト」の活動の様子や回収した衣類、作成した回収ボックスとともに文化祭で展示し、校内外からの来場者に活動を発信した。このプロジェクトを通して「難民」についてより深く知ることができただけでなく、生徒自身の**将来の進路や職業選択について考えるきっかけ**にもなり、視野を広げる貴重な学びとなった。

生徒の感想

小学生の頃に見た戦争の生々しい映像は、今も強く心に残っている。それ以来、世界で起こる紛争や難民問題に関心を持つようになった。本プロジェクトでは学年全体で難民問題や「服のチカラ」について調べ、服が現地の人々の生活や心を支える存在になることを学んだ。私たちの班は保育園を担当し、園児にも伝わるよう物語やカラフルな絵を工夫をした。活動を通して「普通の暮らしは当たり前ではない」こと、そして服には国境を越えて人を笑顔にする力があることを実感した。これからも学びを行動につなげ、より多くの人に発信していきたい。

紙芝居を通し、世界には服がなくて困っているお友達がいること、そんなお友達に着ることが出来なくなった服を届け、笑顔にしようと協力を呼びかけた。



【優秀賞】和歌山県立和歌山盲学校（和歌山県）

見えない・見えにくい誰かに“心で届ける”服のチカラ

生徒による発表（高等部2年生）

【はじめに】

本校は、県内唯一の視覚に障害のある幼児児童生徒が通う特別支援学校で、6歳から52歳まで、様々な年齢や背景をもつ仲間がともに学んでいる。

【私たちが少し困ること】

見えない・見えにくい私たちにとって、服のコーディネートは少し難しい。色の組み合わせがわからないときは、店員さんの力を借りることがある。また、服を選ぶときには、手触りや着心地といった触覚を重視している。触覚は、私たちにとって服の情報を得る大切な手がかりである。

【難民の子どもたちの中に視覚障害のある子どもはいるのか？】

この問いがプロジェクト活動の出発のきっかけとなった。僕が先生に相談すると、先生はすぐにUNHCRへ問い合わせをしてくれた。そこで、世界中の難民の中にも視覚障害のある子どもがいることを知った。同じ視覚障害のある子どもたちに、“**自分の手で服を届けたい！**”という使命感が生まれた。

「**見えない・見えにくい誰かに心で届ける服のチカラ**」を活動のテーマに、自分たちだからこそできる支援を考えた。

【私たちらしい回収活動の工夫】

出張授業で服のチカラを学んだあと、みんなが使いやすい回収ボックスや音で回収場所を知らせるためのテーマソングを作った。さらに見えやすい配色とあわせて、のぼり旗やマスコットも作成した。触覚は服の情報を得る大切な手がかりであるため、手触りも重視した。

誰かに選んでもらうのではなく、“自分で選べる自由”を届けたいという思いから、**「いろポチ（触って色を識別できる布製タグ）」**を取り付けることにした。より美しい畳み方も学んだ。

【活動の成果】

決して多くはないが、回収した227枚の服一枚一枚に心を込めた。活動全体が見えない誰かを思う活動となった。活動は学部や教科を超えて全校で連携し、難民支援の輪は地域にも広がった。活動の原点にあるのは、見えない・見えにくい誰かに心で届ける服のチカラという思いだ。

【私たちが学んだこと】

私たちは難民の中にも視覚に障害のある子どもたちがいることを知り、**自分たちにもできることがあると学んだ。**

服は回収することで、また誰かの役に立つということも学んだ。

私たちは視覚に障がいがあるが、困っている難民の子どもたちのためにできることを考え、服のチカラを心で届けた。この行動が、誰一人取り残さない社会への一歩になれば嬉しく思う。

同じ境遇のこどもたちに、
自分たちの手で服を届けたい！

**見えない・見えにくい誰かに
“心で届ける”服のチカラ**



出所:unhcr.org



出所:UNIQLO.com



出所:unhcr.org

「誰かに選んでもらう」のではなく、
“自分で選べる自由”を届けたい



いろポチ
（触って色を識別できる布製タグ）

■いろポチの取り付け

出所:株式会社フクイ

学部 や 教科 をこえて 全校、そして 地域 へと「支援の輪」が広がった



【優秀賞】和歌山県立和歌山盲学校（和歌山県）

活動詳細

【活動のテーマ】「見えない・見えにくい誰かに心で届ける服のチカラ」

視覚に障害のある難民に“服のチカラ”を届けたい。本校は、和歌山県で唯一、視覚に障害のある幼児児童生徒が学ぶ特別支援学校である。見えない・見えにくい子どもたちが、世界の同じ境遇にある難民の子どもたちのために「自分たちだからこその支援」を考え、実行した。「服を贈る」のではなく、「感覚を通して心を伝える」ことをめざした。

①地域の強みを活かしながら活動に取り組むことができているか

本校では「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に全校で取り組んだ。本校は6歳から52歳までの22名が学んでいる。中途視覚障害や重複障害のある生徒も在籍し、寄宿舎を備え、遠方から通う生徒も多いなど、多様な背景をもつ仲間が共に学ぶ環境が本校の強みである。「学年や年齢、見え方の違いをこえて共に学び、支え合う力を育てたい」という願いのもと、普段は交流の少ない学部を越えて協働した。児童生徒一人ひとりが自分にできることを考え、出張授業への参加、寄宿舎での回収BOXづくり、マスコットキャラクターやテーマソングの制作、団地に立地する学校の特色を生かした地域への呼びかけなど、それぞれの役割を担った。文化祭では手づくりの回収BOXを設置し、来場者から温かい協力を得ることができた。活動を通して地域とのつながりが生まれ、学校全体に一体感が広がった。小学部から高等部までの児童生徒と教職員、そして地域が力を合わせる中で、互いを思いやり、助け合うことの大切さを全員が体感することができた。

②難民問題や服のチカラについての情報収集を行えているか

「難民の子どもたちの中に、視覚に障害のある子はいらっしゃるだろうか？」という一人の生徒の問いから、学びが始まった。UNHCRに問い合わせたところ、世界中の難民の中にも視覚障害のある子どもがいることを知った。また、点字による教育支援や矯正眼鏡の提供、心理的サポートなど、障害のある難民への支援体制が整えられていることも学んだ。この調査を通して、生徒たちは「見えない自分だからこそ見える支援がある」と気づいた。そして、「盲学校だからこその国際貢献」を考えるようになり、「同じ境遇の子どもたちに、自分たちの手で服を届けたい」という強い使命感が生まれた。

③集めた情報を適切に活動に結び付けているかどうか

回収した服は、視覚に障害のある難民の子どもたちに届くことがある。そこで生徒の発案により、服に触って色を感じ取ることができる布製タグ「いろポチ」を取り付けることを考えた。いろポチは株式会社フクイが開発したもので、触覚によって色を識別できるタグだ。小さな突起で色の位置を示し、「赤」「青」「緑」などを触って感じ取ることができる。先天的な視覚障害のある人の多くは色の概念を持っており、自分で色を選び、おしゃれを楽しむことができる。私たちは、「誰かに選んでもらう」のではなく、「自分で選べる」自由を届けたいという思いを込めた。それは、服とともに“自立のチカラ”を届けたいという願いでもある。また、視覚障害者が衣服を選ぶ際には手触りや質感を重視することから、さらに、生徒の希望で美しい畳み方を学び、服一枚一枚に心を込めた。こうした取り組みを通して、活動そのものが“見えない誰かを想う授業”となった。

○学年：特別支援学校（視覚障害）幼稚園、小学部（1,4～6）年、中学部（2～3）年、高等部普通科（1～3）年・理療科（1～3）年 22名

○活動の枠組み：教科（小学部：音楽、図画工作、特別活動。中学部：数学、美術、家庭、特別活動。高等部普通科：家庭、道德、総合的な探究の時間、特別活動。理療科：特別活動）

④活動の「計画設計」と「修正・改善」が適宜行われているか

7月の出張授業をきっかけに、生徒たちは自分たちの学校に合った活動計画を立て、段階的に改善を重ねていった。当初は「集めて送る」活動を想定していたが、調査の中で視覚障害のある難民の存在を知り、活動の方向性を見直した。そして、「見えない・見えにくい誰かに心で届ける服のチカラ」というテーマを掲げ、より思いのこもった支援へと発展させた。

9月には、肢体不自由のある児童生徒でも使いやすい横口付き回収BOXを制作。10月には回収場所を音で知らせるテーマソングを作成した。また、見やすい配色と文字を工夫したのぼり旗を作り、地域への発信にも取り組んだ。

11月には、洗濯やアイロンがけを通して清潔さや香りへの配慮を学び、色を触って感じ取れる布製タグ「いろポチ」を取り付けることで、触覚によるユニバーサルデザインを実践。さらに、服の畳み方・コーディネート講座）や、福山通運による「宅配便のしくみ」の出前授業を受け、服を丁寧に届ける心と物流の仕組みについて体験的に学んだ。こうした取り組みは、計画に沿って進めながらも生徒の発案によって常に改善が加えられ、「ただ送る活動」から「心で届ける活動」へと大きく発展した。

⑤通常の教科学習との関連づけて学びを深められているかどうか

本プロジェクトは、教科学習を基盤にしなが、学部や教科を越えて全校的に連携して展開。その中で児童生徒は、「自分の学びを社会に生かす」という実感を得ることができた。特に家庭科では、持続可能な衣生活の学習を地域への発信や協働へと広げ、「服を通じて心を届ける」という学びを具体的な行動へとつなげる姿が見られた。活動の原点にあるのは、「見えない・見えにくい誰かに心で届ける服のチカラ」という思いだ。視覚障害のある難民に“服のチカラ”を届けたいという願いから始まった取り組みは、生徒たちが自らの感性と力を生かし、「服を贈る」支援から「心を伝える」支援へと発展。世界の同じ境遇にある子どもたちに向けて、「自分たちだからこその支援」を考え、形にした経験は、各教科で学んだ知識や技能を結びつけながら、見えない誰かを想う心を育む学びとなった。それこそが、教科の枠をこえて深まった本校ならではの“服のチカラ”である。



家庭科の授業で子ども服を丁寧にたたんでいる。バインダーを使用した衣服のたたみ方とコーディネートを教わった。

株式会社フクイ様にご提供いただいた「いろポチ」の接着具合を確認している写真。弱視の生徒のため、布製タグの突起を触るだけでなく、目を近づけて確認をしている。「いろポチは」アイロンで10秒押さえるだけで接着できる。

